

## 国際コミュニケーション学部開設一〇周年を記念して

北岡 崇

国際コミュニケーション学部は二〇〇三年に開設され、今年度（二〇一三年度）で一一年目を迎える。この間、学部の基本理念は不変であったし、カリキュラム構成の基本線も変わっていない。今現在、この一一年間の歴史経験を振り返って改めて認識したことであるが、やはり学部の力の第一の源泉は、長い射程を持った持続する理念とその理念のもとに統合された無数の創意工夫にあるのだと思う。学部の各教員が一〇年以上の長きにわたり日々想像力を駆使し、創意を凝らし、工夫を重ね、しかもこれらを一つの理念のもとに統合してきた歴史が、我々の学部の歴史、学部造りの現実である。今後また、無数の創意工夫によって充実された理念、理念によって統合された無数の創意工夫、これが学部を育て発展させていくのだと思う。

開設十二年目の来年度からは、カリキュラムを若干変更する。眼目は、科目群の編成替えとそれにふさわしいカリキュラム運営に学部の今後の展開を期す点にあるが、科目レベルで言うなら、今年度の学部カリキュラムを構成する全科目から七〇科目ほどを廃止し

四五科目ほどを新規に開設することになる。この変更も、学部開設当初から学部を最も深いところで支え導いてきた理念への信頼に基づくものである。それは、〈言語と文化〉への理解に裏打ちされた表現とコミュニケーションの能力、同じことだが言語・表現能力の開発・育成こそが人間にとつての第一の実学、実学中の実学であり、人間が生活していくうえで最も根本的な力、生活する力そのものであるという認識である。我々の学部に、①世界の多様な文化への共感を促す科目、②文化発信力を刺激し向上させる科目、③日・英・独・仏の四つの国際言語に関する科目、これら三種の科目が数多く開講されているのは、上記の認識を土台に据えて、国際人を育成したいと考えているからだ。

最後に、我々の学部の卒業生のことを話したい。国際コミュニケーション学部の第七期生までは大部分がすでに学部を卒業している。在学生とは異なり卒業生と話す機会は少ないが、それでも、卒業生の累計数は年々二〇〇数十名ずつ増えていくし、古巣を懐かしく思うのか、毎月のように誰かが一人、あるいは誰かと連れ立って訪ねてくる。うれしい経験だ。卒業時に就職した企業に勤務し続けている者、卒業後間もなく転職した者、卒業時に無職であったがその後仕事に就いた者、結婚や出産の後で会社勤めを辞めた者など、仕事の側面一つから見ても当然のことだが、各人各様だ。しかし、彼女らの言動に、国際性の深く浸透したこの現代社会で懸命にかつ果敢に自分自身の生活を切り開いている姿を見ると、私は感動を覚える。そして、流した汗水が報われたと感じる。

(2013/12/20)

## 学部「展開」期(二〇〇七年) 二〇一〇年)を振り返って

塚田 守

国際コミュニケーション学部改組五年目から八年目までの四年間は、学部の「展開」の時期だったと言える。文学部から国際コミュニケーション学部に改組することで刷新したカリキュラムは、さらに文部科学省から学部として「国際」と「表現」の特徴強化の必要性が指摘されていた。その過程で起こった教育レベルでの「展開」を中心に、研究および施設の物理的「展開」についても振り返ってみる。

第一として、カリキュラムの「展開」では、まず「表現」の中で、創作の側面が弱いとの指摘に対し、小説やエッセイを実際に書いているスタッフが加わり強化された。次に、演劇を新規に加え、それまでなかった新しい「表現」の「展開」がなされた。さらに、現代日本文学を取り扱う分野に音楽やアニメもテーマになる視点が、「表現」の中で重視される「展開」になった。

もう一つの強化側面である「国際」について、アジアの英語教育や世界言語としての英語に関連した科目が設置されたことは、それまでの英語の枠を超えた、語学の「国際」の側面の「展開」であったと言える。また言語側面だけではなく、グローバルイノベーションを含む社会科学の意味の「国際」の「展開」も行われた。

さらに、就職支援としての資格取得という面で、二つの新しい「展開」があった。まず、TOEICプログラムのクラスの規模を少人数制にすることで、よりよい効果をだし、学生の就職活動支援になるようにと考えられた。二つ目は、バンクーバーの英語学校との提携で「J.Shine (小学校英語指導者資格) プログラム」を、日本の大学として初めて、その正資格を与えるプログラムを開始した。

このような「展開」のなかで、「言語」と「表現」の二つの特徴をもつ「国際コミュニケーション学部」が確立され、就職支援として資格を重視する「展開」が行われたのではないかと思われる。

第二として、学部メンバーの研究への「展開」にも触れたい。文部時代から学術振興会の科研費補助金へ応募する者はほとんどいなかった。しかし、新しい研究分野をテーマとする若手スタッフを中心に、科研費補助金への申請することが多くなり、採択率も上がってきている。また、さまざまな学会での研究発表やシンポジウムでのパネリストとしての参加、外部の講演会で講演するスタッフも多くなり、社会に発信する研究者が増える「展開」が見られるようになった。

第三として、国際コミュニケーション学部棟の改修もまた、新しい学部としての「展開」と言えるであろう。他の学部と比較し、古いイメージがあった国際コミュニケーション学部棟であったが、理事長の支援を得て、教室のIT設備が整備され、個人研究室内部、廊下なども改修され新しく明るくなった。また、この時期に、Self Access Center (セルフ・アクセス・センター) も新しく設置され、視聴覚機器が整備されただけでなく、チャット・チャットや文法チュー

ター、異文化に関するプレゼンが行われるなどの、「学生が自主的に活動する場」ができた。

さらに、学生控え室のテーブル、椅子が新しく入れ替えられ、新たにパソコンコーナーや窓に面した一人かけ椅子なども設置され、学生控え室が以前にも増して、「学生の居場所」として機能するようになったのも、学部としての施設の物理的「展開」であった。もう一つ付け加えるならば、「学生禁止」の張り紙がされていた小規模エレベーターに加え、大型エレベーターが設置され、エレベーターは学生も使えるものになり、時代の変化に対応した「展開」がなされた。

カリキュラムの継続的改革という「展開」、スタッフの研究の「展開」、さらに、学部棟の改修という「展開」の三つが私の学部長時代に起こったことだったと、今振り返って思う。一〇周年の今年もまた、様々な側面でさらなる「展開」が起きている。その「展開」は、学部構成員全員の「意欲」、「協力」、「学生を思う気持ち」の反映ではないかと思う。そんな元気で明るい学部のメンバーの一員として、今後も積極的に参加していきたいと考えている。

## 平成二十四年を振り返って

深谷輝彦

平成二十三年度は前学部長の塚田氏から学部長職を引き継ぎ、学部長としての公務をこなし、どのように振る舞うかを学ぶ時間であった。次の平成二十四年は逆に、学部改革を考える上で重要な出来事が二件起こった。一件は Westgate による英語教育プログラムの導入、もう一件は教育学部との共同大学院の設置であった。いずれの案も様々な事情で実現することはなかったけれども、その意義を確認し記録することは、将来の国際コミュニケーション学部にとって有意義であろう。

Westgate が提供する英語教育プログラムは、教育学部、看護学部、文化情報学部という三学部ですでに実施されていた。そこで、塚田氏と教育学部に出向き、Westgate の授業参観を行ったのが第一歩であった。その後いくつか段階を踏んだ後に、Westgate の担当者や国際コミュニケーション学部がすでに実施している英語プログラムがどのように棲み分けをするか、議論した。その結果、Westgate が大学英語入門の役割を担い、従来からある Communicative English や Academic English を中心としたプログラムにバージョンアップするという合意に至った。つまり、国際コミュニケーション学部の一年生のうち、中級ぐらいまでの英語力

を期待する学生には Westgate のプログラムを、上級までめざす英語学習者には Westgate + Academic English という構想であった。

カリキュラムの中味の議論と平行しながら検討したのが、時間割の構築であった。Westgate は、月曜から金曜日まで毎日四〇分ずつ授業を実施するという教育方針を持っていた。国際言語の学生の場合、さらにバージョンアップした Communicative English の授業が週三回、さらに独語または仏語を週三回履修するために、教養基礎科目の履修時期が二年次以降になるという時間割編成となった。

長澤氏のご尽力により、一週間の時間割ができあがってみると、外国語教育が占める割合が際立っていた。当初はこれほど外国語でいいのだろうかと半信半疑状態であった。しかしながら、様々な場面で説明している内に、本気で国際色を打ち出す学部をめざすのであれば、一年生は外国語に明け暮れるというぐらいのカリキュラムが望ましい、という判断に至った。特に他大学の外国語学部と競争するときに、独自色を打ち出せるという点も魅力的であった。

もう一点振り返りたいのが、教育学部との教員養成共同大学院構想である。国際コミュニケーション学部単独の大学院構想については躊躇を感じていたが、教員養成という明確な教育目標を持つ教員養成修士課程であれば、それなりの志願者も期待でき、またなによりも教育学部と共同で教育するという意義が見いだせる。そのような大いなる期待をしながら構想会議に参加させていただいた。しかしながら、その後、文科省の大学院規程で、二学部が共同で大学院を構築しても認可されないことが判明した。長期の教育実習を行う

など、独創的なアイデアにあふれた大学院であっただけに、将来なにかの形で教育学部と改めて連携できる日が来るのを待ちたい。